

自然災害を 思考する②

安政江戸地震と

国土の条件

幕末の江戸は既に人口130万人の大都市であったが、幕府の行政システムは多くの機能を「町役人制度」に依存していた。例えば町方60万人弱の治安は南北町奉行所に管轄されていたが、奉行所役人は与力と同心合わせて2500～3000人位しかいなかつた。明治4年、新政府が3000人の警察官を市中に配したのと比べると、江戸時代の政府（幕府）の規模が分かる。これを

1853年（嘉永6年）の調べでは、市中全1637町の行政は、町年寄3人、名主220人、地主約1万400人、家主約1万6000人に委ねられており、二、三町十数町を支配していた町名主が、今まで言う町役場機能を果たしていた。

敏速に救済活動

幕府、幅広く

なった「町会所」も町会組が積立金を出して運営の度で、町政は町役人の自治に委ねられていた。補っていたのが町役人制度として治めていた。（）書時の救済事業の拠点ともいわれた。町役人は、町会所も町番組が積立金を出して運営し、震災報告も救恤記録も、この町番組単位でまとめられた。※（野口彦『安政江戸地震―災害と政治権力』より）

当時の幕府は民生（町政）に介入する責任はなかったが飢餓、火災、風水害、疫病流行などの非

常時（自然災害時）には、幕府は「公」として敏速に幅広い人々を対象として救済活動を行い、安政江戸地震の際も大規模に行われている。

対応は小さな政府の時代。それでも、大規模な自然災害が発生した場合、必ずして一国の首都の危機には、民心を安んじて改めて教えてくれるため政府が積極的にしなければならないことを改めて教えてくれる。国土は軟弱地盤で巨大地震が頻発する「安政江戸地震」

であつた。神田辺を束ねる町名だつた。彼が別にまとまりにあつた公式町方記録「武江動の記」第二回書上げによると、死者が多いのよると、三番組（浅草）の57人、十三番組（湯島・谷辺）の366人、十四番組（本所南部）の34人、十七番組（深川）の1186人、十八番組（本所北部）の474人、番外・吉原の630人である。これらは地区は他地区いづれも隅田川沿い、昔の日暮の延伸で

日本とドイツの沖積層

軟弱地盤上に立地する大都市(日本と
日本は、武藏野台地や江戸前島(日本橋台地)の
いいた地区で、これらのこれらは、
蘇らる
歐出

れただとか確認できる。
このように「公」は自然災害に伴い改めて市井の人々に認識され、市井の人々はこの「公」の出現を期待し感謝した。安政二年（1855）の幕府の斎藤三岑は「武江年表」の筆者た江を中心部の被書はなかつた。これらのことは、町番組ごとの被災数（死者数）を比較すると更に明確になる。

江戸町番組の死者数※



江戸とその自然地形※



（数字は第二回書上げ、下図は「江戸の名手番組」）

(原図は鈴木理生『幻の江戸百年』ならびに『岡表日本都市史』による)